第１回富山県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム幹事会 議事録

日時：令和８年 10 月６日（火）10 時～11 時 30 分

場所：県民会館 705 号室

１厚生企画課長挨拶

県では、孤独・孤立対策推進法の施行を受け、令和 6 年 10 月に「富山県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」を設置。昨年度は、皆様からのご意見を踏まえ、4 回の勉強会を開催するとともに、今年度は住民向けイベント「富山つながりフェア」を初めて開催した。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げる。

本日は、これらの取組みの実施結果や国の重点計画の改定内容を共有するとともに、孤独・孤立リスクの減弱因子に関する報告をいただく。今後の県の取組み方針について、皆様から幅広い視点で忌憚のないご意見を賜りたい。

２幹事長挨拶

単身世帯の増加や働き方の多様化などの社会構造の変化により、孤独・孤立の問題は深刻化が懸念されているが、富山県の実情に応じた施策を実施していきたいと思いますので、皆さんの現場からの声を聞かせていただきたい。

３報告

資料１・２、参考資料１・２により説明（厚生企画課）

【立瀬幹事長】富山つながりフェアについて、五十嵐幹事から参加された感想をいただきたい。

【五十嵐幹事】つながりサポーター兼ファシリテーターとして参加し、途中から来場された方には声をかけてテーブルへ案内したが、イベントの支援者同士が顔見知りだったことから、「この相談ならこちらのテーブル」といった適切な案内ができ、支援者同士のつながりの強さが大きな強みだと感じた。

また、ゲートキーパーネットとやまの研修会に参加された方が来場され、自身がヤングケアラーだったことを話されたため、西島さんにつないだ。その後その方が、ヤングケアラーの居場所づくりのイベントを企画されることになり、新たな活動につながったということがあった。

【立瀬幹事】そのヤングケアラーの居場所の会をこの会でも共有したいので、今後も情報共有をお願いしたい。石動幹事から勉強会の感想をいただきたい。

【石動幹事】勉強会に参加される方は、熱意をたくさんお持ちの方たちだった。今のお話を伺い、まず、孤独・孤立対策を支える我々の方が孤立・孤独だったらだめだと、まったりとした富山らしい濃いつながりを持ってないと、十分な対応はできない。それにあたって、今年度の企画もそうだが、支援者同士が濃い関係というふうにチームになるっていうことは、富山らしさになるのではないかと思う。

【立瀬幹事長】つながりフェアでは、新たに「つながりサポーター」にファシリテーターとして入っていただいたが、そうした場を設けることで支援者同士のつながりが強くなると感じた。今後は、人材交流のような取組みも一つの方法ではないかと考えている。講習会で人を集めるだけでなく、その後のつながりを生み出すことが重要であり、プラットフォームとしても検討していきたい。また、つながりフェアについては、一人で来場された方が多かった。さらに、「一人でいることが好き」という方が多く、繋がって生活をしたくてっていうのでなく、

ちょっとしたときに気軽に立ち寄れる場所や話せる場を求めているのではないかと感じた。

４議事

【立瀬幹事長】それでは議事に入りたい。まず私から、つながりフェアの反省会の中で、30～40 代女性、40～50 代男性の孤独感が高いことについて、その背景要因に関する意見が出されたため、県で収集したデータを分析した。その結果について簡単に報告したい。

資料３により説明（立瀬幹事長）
資料４により説明（厚生企画課）

【飯田幹事】重点計画に不登校の増加の関連のものはあるか？

【事務局】若者の自殺の増加が今回の改正の大きな関連かと思うが、不登校について確認する。

【立瀬幹事長】具体策として上がっていなさそう。トー横キッズみたいな子たちが街に溢れてというような流れの中から対策として上がってきているのだろうという感じはする。

【飯田幹事】不登校の子たちへの居場所、イベントを今後何か検討したほうがよいと思う。

【子ども未来課】自分は今回「困難を抱える女性の支援」の立場で出席しているが、子供の居場所については県でも課題として認識しており、居場所のあり方など検討をすすめているような状況。

【立瀬幹事長】今の困難な女性の支援もこの孤独･孤立とも関連するので、相乗りしながらできることは非常に大事だと思う。

資料５により説明（厚生企画課）

【立瀬幹事長】資料 5 の取組み体制について、従来との違いとして、タスクチームがケースカンファレンスの企画・運営を担い、自立的に活動する体制としている。今後は、ケースカンファレンスの振返りも踏まえながら、タスクチームで様々な課題について検討していくことになると思う。具体的な案も出ており、付き添いサポーターの仕組みが挙げられている。相談者の中には、窓口を紹介されても自分の状況をうまく説明できず、もめて帰ってきて、その後は行政窓口に行きたくなくなってしまうケースが少なくない。そうした人に寄り添い支援する人材の必要性について意見が出ている。また、つながりフェアで実施した「おしゃべりベンチ」に関しては、会場でベンチには座れるもののグループには入れない男性に、少し声を掛けるとグループに入っていくということがあった。おしゃべりベンチのような人とのつながりを自然に生み出すような仕組みについても、民間団体だけでは難しいので、県の事業としてあってもよいのではないかとの意見があった。プラットフォームを１つ作ることで、各課や市町村、社協等が連携して提案する形を作っていけると考えている。

資料６により説明（厚生企画課）

【麻生幹事】富山県心の健康センターでは、県民が孤独・孤立を抱え込まず安心して過ごせる居場所づくりを目指し、9 月からフリースペース「Together」を開始した。県内各場所に居場所を作っていきたいという思いがあり、地域ごとに様々な居場所のあり方があると思うが、まずは自分の所で 1 度作って検討しているところ。今後、取組みの成果や課題を共有し、県内に居場所が増えていくようにと考えており、関係者の協力をお願いしたい。

【飯田幹事】とても良い取組みだと感じた。民間でも地域ごとに「居場所とは何か」を考えながら、様々な形で居場所づくりに取り組んでいけばよいのではないかと思う。
また、生徒だけでなく地域住民の居場所としての活用も今後検討できるのではないか。星槎では、ひきこもりや未就労の状態にある卒業生への支援が課題となっており、そうした卒業生の居場所づくりも進めていく必要があると考えている。

【立瀬幹事長】来年、その状況をお聞かせいただければありがたい。
今回の議事の内容についても、ご意見があれば

【飯田幹事】うちに通う生徒の 9 割以上が不登校を経験しており、若者の孤独・孤立対策では、不登校支援もしっかり考えてほしい。そのため、教育委員会や学校関係者もプラットフォームに参画していくべきではないかと思う。公立学校の先生の理解がなかなか難しい中、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの役割は重要であり、こうした専門職が公立学校でより活躍できる環境づくりが必要である。
　高校中退の子の支援についても検討してほしい。社会復帰できているかというと、中にはひきこもり状態となるケースもある。いきなり就労につなげることは難しいため、再び社会とつながるための居場所や安心して話せる場が必要。
　先日、氷見市社会福祉協議会が運営する居場所「ラシック」を見学した。小学生から高校生 10 名ぐらい利用しているようだが、学校との連携が難しく、居場所への参加が出席として認められていないという話もあった。まずは居場所に来ることで誰かとつながること自体が重要というところも、学校の先生に理解して欲しい。

【立瀬幹事長】ひきこもりだけで言うと、こども未来課のイメージだが、中退者がそのまま成人になっていくときに、闇バイトみたいなものに引き込まれるパターンも考えられ、経路全体を考えていく必要があると思う。

【井山幹事】ある所属から外れてしまうと孤独・孤立は一気に進んでしまう。氷見市で自治会の役員をやっており、今回の大雨では地域と交流の薄い 80 代女性と 50 代の娘さんから助けてほしいと連絡が入ったり、その連絡手段すら持ってないような高齢者もいる。資料 4 にある「地域における孤独・孤立対策の推進」というところで、学校退学とか所属を外れてしまったとき、やはり地域の中の一員っていうものは最後の受け皿的な部分があるのだと思う。

【立瀬幹事長】氷見は、地域の力が強い。そこを他の地域にレクチャーするような場があれば。昔ながらの繋がりが残っていることは 1 つの社会資源だと思う。

【炭谷先生】民生委員として地域を回っていると、姿を見かけない若者や一人暮らしの人の存在が気になっているが、どう声をかければ、訪問すればよいか分からないという話を聞く。高齢者対策はあるが、その辺の人たちへのかかわり方について情報がないのではないか。

【立瀬幹事長】昔は、地域で自治会長や民生委員さんに相談するということが何となくインプットされていたが、今はそれがない。資源としては残っていても、そこにどう繋がるかがうまく機能しない。

【村岡幹事】実際地域で、民生委員さん、これまで地域でつなぐとか見守る役割をしていた方たちが、壊滅的にいなくなっている状況がある。
　ボランティア活動についても、従来は同じメンバーが長期間継続する形だったが、新しい方が入らないので世代交代ができず、担い手の高齢化や後継者不足により活動が難しくなっている。一方で、ボランティア参加者が減ったわけではなく、関心のある活動に単発で参加する形へと変化している。従来の枠組みだけでは活動の維持が難しく、支援者同士がこれまで以上の範囲で繋がらないと難しい。

【炭谷先生】町内会も同様に世代交代できない。コロナ禍で旅行会などの交流行事も減少したが、何か町内会の小さな活動をつづけ、またそれを支援する体制を社協としても作っていければ。

【立瀬幹事長】その主体は社協がよいのか？

【炭谷先生】高齢者サロンやケアネットをやっているので、他の世代に展開すれば。高齢者や障害者向けの既存の仕組みや地域包括ケアを他の世代にも広げ、つなげられればよい。

【立瀬幹事長】特定の課や組織に限らず、地域活動に関わる方々と横断的に考える課題である。地域全体へのポピュレーションアプローチとして、孤独・孤立対策の底上げにつながる貴重な意見。

【麻生幹事】仮設住宅での花壇づくりや、呉羽山で雑木林の一角に花壇を設けて人が集まるようになった事例があった。地域のつながりが乏しい新興住宅地でも、つながりを作るとすれば、例えば園芸のように何か作業をすることは大事だと思っている。今おっしゃっていた制度づくりに加え、まずは具体的に活動できる場をつくることのよいのではないか。

【立瀬先生】居場所のような園芸は、何かはモデルあるか。

【麻生幹事】英国にはあり、そういうものをいろんな場所に作っていきたいという思いはある。デイサービスなどでは聞くが、街中でもっとあればと思う。

【石動幹事】資料２の富山つながりフェア開催結果では、一人でいたい方がいるとの感想があった。私たちも孤独・孤立を抱える方を社会制度や支援制度につなげようとするが、本人が変化や相談、現状改善を望まず、反発する方もある。こうした方への社会福祉的なアプローチが難しい。今年度の勉強会の計画では、その対応を学べるため、タイムリーだと感じた。今後もこうした方への対応が残っていくと思うので、今後の人材育成が必要。若い世代は自分ファースト、地域への関わりを後回しにする実態があるので、そことどう向き合うかを考え、実践につなげられるよう、今年度のような勉強会を継続していただければ、サポーターも学びを深められると思う。

【五十嵐幹事】昨年、子どもが生後６か月を過ぎた頃に自殺された方がいた。父親や夫がおり、子育て支援セン

ター、電話相談、保健所などの相談先もある中で起きた。制度はあるが、地域で「赤ちゃんはどうしている」と日常的に声を掛け、何気ない愚痴を話せる場をつくる視点も必要だと思う。30 代で退職して出産した方などは、地域になじむ方法が分からず、何をすればよいか戸惑う。若い世代は町内や地域活動に参加しにくい面もあるが、食べ物のある場にはよく参加する。声掛けを煩わしく感じる面もあるかもしれないが、若い方と関わる取組みが必要ではないか。

【健康課】現在は富山市で一人暮らしで、子どもの頃に参加した実家の地域の祭りにも足を運ばなくなった。話を聞いて、集合住宅では身寄りがなく孤立しても気づかれにくいと感じ、地域のつながりの大切さを実感した。

【立瀬先生】孤独・孤立の人と地域とのつながりについて、具体的な解決策を考えること、先ほどの五十嵐さんの食べ物も 1 つのアイディアで、 何かこの会の意見で、若い人・働き世代の人たちが仕事と家庭以外で繋がれる場所を創造していくことも 1 つの大きな課題だと思う。

いただいた意見をできるところから精査し、ご相談しながら進めさせていただきたい。

（以上）